

「どうもかわいそう」再び

——『かわいそうなどう』の虚偽

長谷川 潮

(1)

古書店の棚で、たまたま野坂昭如の『戦争童話集』（中央公論社、一九七五）という本を見かけて購入した。一九七〇年代の終わりごろだから、四十年余り前のことである。作家野坂にはあまり関心を持っていなかったが、書名に惹かれた。

『戦争童話集』は雑誌『婦人公論』（中央公論社）に連載された十二編の短編から成っており、そのすべてが「昭和二十年、八月十五日」という一行で始まっている。先頭の作品名は「小さい潜水艦に恋をしたでかすぎるクジラの話」だが、これだけを見てもわかるように、この作品集は子ども向けの童話集ではなく、むしろ大人向けの寓話集と云うべきものである。三番目の「干からびた象と象使いの話」を読み始めたとき、こういう記述にぶつかってわたしは愕然とした。

昭和十八年というと、まだ日本人は、戦争に勝っているものと、信じこんでいました。いくら軍部が空襲をいい立てても、そう本気では考えず、また軍部にしても、それまで「醜敵一機だに侵入を許さず」と太鼓判押ししていましたから、実は敗戦が続いている実状を、今さら説明しにくい。

そこで動物を、それほどの必要もないのに、犠牲にしようと考えたのです。ライオンや象が殺されるときは、否応なく切迫した事態に気づかざるを得ないし、また、かわいい動物殺すのも鬼畜米英のためと、国民の憎しみをあおることもできます。みんながそのことだけを考えてくれれば、結局は、軍部の責任である敵の空襲についても、非難されなくてすむ。

この作品は題名からも推察できるように、昭和十八（一九四三）年に、上野動物園の二十七頭の猛獣が処分（この